

暖地アスパラガスの収穫期の早進化について

(第2報) 保温育苗による無仮植栽培のは種期と定植期(予報)

後藤 道徳・江藤 博六

(宮崎県総合農業試験場都城支場)

GOTO, M. and ETO, H.

(II) Hastening the Harvest Time of Asparagus in Warmer Region of Japan.

当地域のアスパラガス栽培は、保温育苗して苗を早く育成し、2年目から収穫を始める新栽培方式をとっている。この栽培は初年度から収穫期間を延長することによって耕種的に“くきがれ”病を回避するとともに、当初からの多収穫をねらっているので、植え付け当年は特に株の生育促進をはかる必要がある。は種期と定植時期について昭和42年から試験を行ない、一応の結果をえたのでその概要を報告する。

I. 試験方法

早まき、ビニールトンネル育苗→植付と、従来の露地まき→仮植育苗→翌年春植付の栽培について、第1表に示す試験区によって検討した。

II. 結果および考察

2月15日まき保温育苗区の発芽は、慣行区3月31日まき露地育苗区より39日早く、苗の生育も約30日早進した。苗床での生育は、第1表に示すように、は種期、育苗日数によって生育差が大きく、移植による生育停滞などに差が生じると思われたが、この試験では5月中旬から6月中旬まで早ばつがあり、供試区中、(1)、(2)、(4)区に植えたみが若干多くなり、その判定は不可能になった。しかし、早植した(1)、(2)区の回復は早く、後半の生育は1区が最もよかった。収量は第1図のとおりで、初年度収穫は(1)、(2)区が早害に遭遇しながらも平均以上収量を得た。44年度は、暖冬による冬期の茎の発生、枯死、収穫期の早ばつ、初年度収穫過多でいずれも減収したが、前年に引続き1区が最多収であった。このことから保温育苗のは種期は2月中旬が適期で、植え付けは苗令、梅雨期との関係から5月中下旬が適当と思われる。しかし、植付時に乾燥すると植いたみを生じ、それによる減収が避けられないので気象条件を特に考慮して植え付けることが必要である。

第1表 発芽日数と定植期の苗の生育

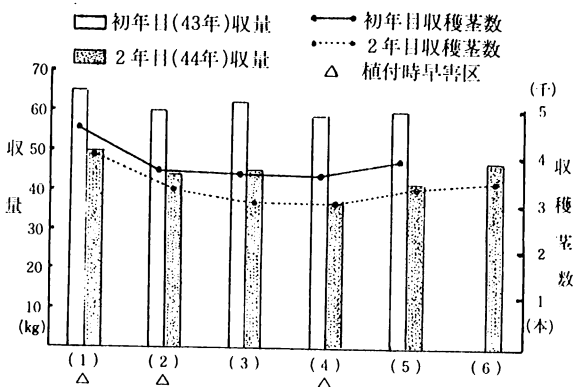
区番号	区 別			発 芽			定植期の生育		
	は種期	定植期(仮植)	育苗日数	期	日数	率	茎長	茎数	
保温育苗	1	2 15	5 16	90	3.15	28	72	25	3.6
	2	2 15	6 5	110	3.15	28	72	40	6.5
	3	2 15	6 25	130	3.15	28	72	56	8.4
	4	3 1	6 19	110	3.28	27	71	50	7.7
	5	3 15	7 4	110	4. 9	25	71	52	8.3
慣行	6	3 31	(6.30) 43. 3.20	(90) 340	4.28	28	65	(28)	(6.5)

注) 慣行( )は仮植期および仮植期の生育

第2表 植え付け後の生育

調査期	8月1日		9月1日		10月1日		11月1日		茎直径	
	茎長	茎数	茎長	茎数	茎長	茎数	茎長	茎数		
区別	△ 1	75	13.3	105	27.9	130	28.0	139	26.0	0.83
	△ 2	59	7.2	97	16.8	124	19.7	134	21.0	0.84
	3	69	10.3	95	20.9	129	20.9	137	22.3	0.89
	△ 4	68	9.6	100	17.4	125	19.5	139	20.1	0.85
	5	67	10.1	95	21.3	123	24.5	133	23.7	0.83
	(6)	45	9.3	80	15.0	112	13.0	113	13.3	0.59

注) △植え付け時早害、(6)は仮植床の生育



第1図 a 当たり収量と収穫茎数